

「せいくらべ」の不思議

二人の孫が遊びに来ると、二階の書架の側面で身長測定をするようになって何年になるだろうか。三角定規を当てて固定した頭頂位置に鉛筆で線を引き、巻き尺で測定後に線の上下に「名前」「日付」と「測定値」を鉛筆で書く。僅かな期間で思いがけぬほどの伸びを示す時期があって、「日々成長を続ける生き物」を強く感じることもある。

こんなことをしながら、いつも頭の中を流れる子どもの頃に歌った歌。

はしらのきずはおとしの 5月5日のせいくらべ
ちまきたべたべにいさんが はかってくれたせいのため
きのうくらべりゃなんのこと やっとはおりのひものため

はしらにもたれりやすぐみえる とおいおやまもせいくらべ
くものうえまでかおだして てんでにせのびしていても
ゆきのぼうしをぬいでさえ 一はやっぱりふじのやま



何度となく歌詞が脳裏をかすめるうちに、いくつか疑問が湧き出てきた。

「なぜ、昨年ではなく一昨年の背比べを思い出すのだろうか？」

「やっど羽織の紐の丈」とは、「羽織の紐の長さ」のことなのか「羽織の紐の位置（高さ）」のことなのか、どちらだろう？

「柱にもたれると遠くに山並みが望める」お家、その山並みの中に「雪が付いた富士山が見える」、この作詞者は「どこに住んでいてこの歌詞を書いたのだろうか？」

この歌の作詞者は海野厚、作曲は中山晋平。

海野厚は静岡市駿河区豊田（この歌ができた頃は豊田村だったかもしれない）の生れであることが解った時点で、同じ静岡県出身ゆえの親近感から一層興味が増してきた。

豊田は静岡駅と久能山・日本平がある小山との中間に位置する。東側に日本平、北側と西側に赤石山脈の最南端の山波が窺えて、まさに「遠い小山も背比べ」の景色が家の中から味わえたことと想像できる。旧制中学までを静岡で過ごした海野は、早稲田大学を目指して単身上京。のちに北原白秋に認められ、童謡や俳句の世界に入っていくが、1925年に肺結核により28才で他界。

久しぶりに帰ったふるさとの我が家での感傷を歌った詩だろうと言われている。

海野は七人兄弟の長男のようなので、「ちまき食べ食べ兄さんが計ってくれた背の丈」という表現は「自分の目からの言葉」ではなく、「弟か妹の目を見た言葉」のように読み取ることができる。

さらに情報を探してみたら、「17才年下の弟をとりわけ慈しんでいた」ことから「この弟の視線で書いた詩」ではないかと補足した情報に出会うことができた。

そして最後に残った疑問「やっど羽織の紐の丈」については「作者の心」を探ることはできず、後の世の人々の解釈が諸説あり今や真実はわからないとのこと。

「羽織の紐の長さ？」そんな背が低い・・・？ と思ってしまったが、旧制中学を卒業して間もない青年（少年）から見て17才年下の弟は、時期によっては「羽織の紐の長さ」ほどだったかもしれない。しかし、羽織の紐にも型や長さが色々あるようだし・・・。

鏡台の前に二人で並んで立って、手のひらをかざして背比べをする光景を思い浮かべると、「腰の高さ」「胸の高さ」「肩の高さ」などの表現をすることがあり、「羽織の紐の位置（高さ）」は十分に考えられるし、表現としての美しさも感じられる。

すべてが解明できてしまったら面白味は半減してしまう。不明な点がありそれを想像するから面白いのかもしれない。